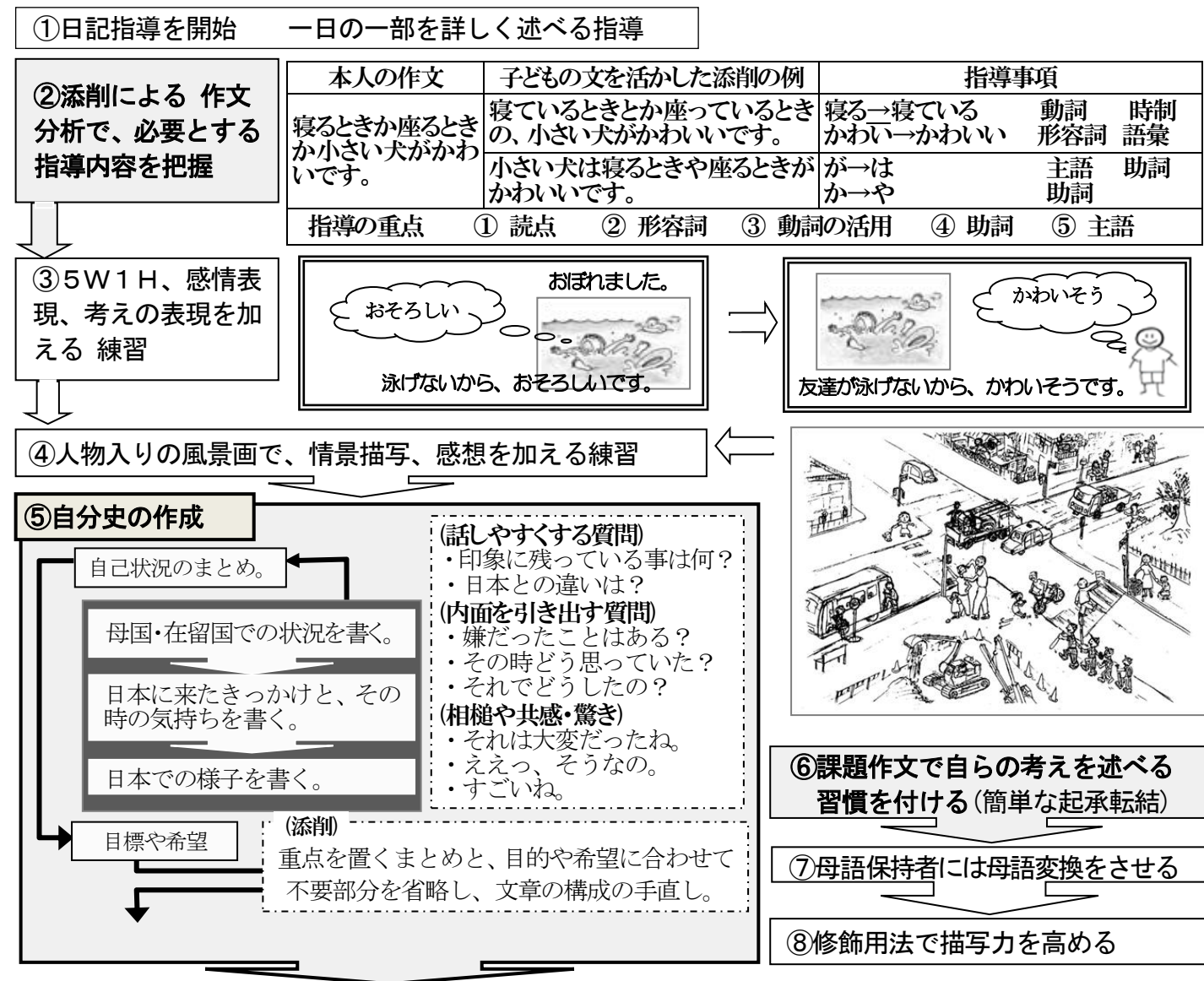


学習力を育める作文指導法への挑戦

—自分史を通して—

田中薫 (とよなかJSL)

実践の場の特徴 とよなか国際交流センター内の日本語教室に90分ずつ週3回通級し1年から1年半で学習理解に近づくことを目標として日本語を学ぶ方式。教案で研鑽を重ねた市民グループが指導に当たり、日本での生活に自信や満足感のない子どもや、教科の学習理解が遅れていて、予定期間を超えてもなかなか前進しない子ども達の、日本語力や学習意欲を改善するため研鑽を続けてきた。



成果	① 日記	・書くことに慣れる。
	② 添削	・必要な指導を絞やすく、日本語学習の成果と課題が理解しやすい。
	③ 感情・思考	・気持ちや原因の表し方、客観的な見方がうまくできないことを克服できる。
	④ 人物入りの風景画	・経験と結びつけて第三者の立場で見られる。 ・客観的に見たり共感や批判など、自らの考えを素直に表現しやすい。
	⑤ 自分史	・自らを語る機会を内省に繋げ、目標や希望に導く機会となる。 ・本音で語ることで、臆していた話すことから開放され、うまく話せなかった子どもが積極的に話しかける姿に変容。 ・覚えやすい自分の言葉で書き留め復唱することで、日本語文の特徴を掴め、日本語で話す・書くことへの抵抗が減る。
	⑥ 課題作文	・起承転結の書き方は文章構造の理解を助け、要点を考える力が付き、聞き取りやすい発話を生み出す。要点の体得は読解での要点把握の向上にも繋がる。
	⑦ 母語変換	・母語保持・推進の重要性を自ら感じ取る発言、保護者との関わりに深まりが出た。

これらは教授型の授業で得られない子どもの内面に迫り、信頼関係を深める。聞き流しに終わらず書き留めることで、子どもも指導者も力量の向上ができる有効な手立てだと分かった。本音の作文は子どもが自ら学習に取り組もうとする姿勢に変え得る教材だと言える。